



発行日 = 2002年2月25日 発行人 = 面出薫 編集 = 田沼彩子・早川亜紀
照明探偵団・事務局 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-28-10 ライティング プランナーズ アソシエーツ内 (田沼彩子)
TEL : 03-5469-1022 FAX : 03-5469-1023 e-mail=tanteidan@lighting.co.jp http://www.lighting.co.jp/tanteidan/

照明探偵団通信

vol.12 Shomei Tanteidan Tsu-shin

海外照明探偵団レポート / シンガポール

祝祭照明 in Singapore

常夏の季節感から学ぶ光の考え方あれこれ

照明探偵団倶楽部活動 1

街歩き報告「東京ディズニーシーリゾート」

照明探偵団倶楽部活動 2

研究会サロン報告

展示会「e-fashion」レポート

面出の探偵ノート / ソウル

日本の祭り

NHK「首都圏ネットワーク」出演

照明探偵団日記



ボート・キー / シンガポール

祝祭照明 in Singapore

- シンガポールのお祭り照明事情 -

毎年10月から2月までの期間、シンガポールの街の様々なエリアで各民族の伝統的なお祭りを祝した装飾照明がそれぞれのストリートで行われています。こうしたストリートライティングは、1983年にオーチャードロードのクリスマスライトアップが行われて以来、シンガポール観光局によって実施されるようになりました。

その後、シンガポール観光局が文化的な祝祭を促進する一環として、セラングーンロード、ゲイラン、チャイナタウンの3つの有名な民族地区でもストリートライティングを行うようになりました。これらの地区には各民族の伝統的なお店やバザールがひしめきあっていて、お祭りの期間には活気を中心となっています。

お祭りでは必ずと言っていいほど、誰もがバザールを訪れます。熱帯気候のシンガポールでは、バザールがにぎわうのも屋外で過ごしやすい夜になってから。そのため、ストリートライティングはバザールには欠かせないもので、通りに活気をもたらします。

四季による色や雰囲気の変化がないシンガポールにおいて、ストリートライティングは都市のランドスケープを祝祭で彩り、季節を感じさせる重要な役割を果たしています。

10月末の“ディーパバリ”（光のお祭り）が祝祭の幕開け。お祭りを祝してヒンズー教徒たちは家庭でオイルランプを灯したり、“リトル・インディア”として知られるセラングーンロードをイルミネーションで飾ります。

続いて11月半ばにはゲイラン地区で“ハリラヤ”を祝うイスラム教徒達のライトアップが。同じ頃にオーチャードロードではクリスマスライトアップが始まり、11月から1月にかけて年が変わるのを祝います。2月にはチャイナタウンのライトアップが中国の旧正月を祝って一連のお祭りを締めくくります。

この中ではオーチャードロードのクリスマスライトアップが最も大規模なものでしょう。にぎやかなダウンタウンのショッピングエリアに位置しているので、他のエリアよりもスケールの大きなものになっています。通りのデコレーションに加えて、“Best Decorated Building”のタイトルを競うオーチャードロード

沿いの建物のオーナーたちがファサードを巧みなライティングで変身させます。

さらに、クリスマスライトアップは照明デザインの予算など、他の照明とは別枠で考えられています。最近ではデザインもおもちゃや天使など、クリスマスのオーナメントを使ったものから実践的な照明効果を利用したものに発展しています。昨年はオーロラにヒントを得て、8万本のホログラフィックチューブに光を投影し、虹が表現されていました。

また、一昨年には青と白の光とホログラフィックの星でつくられた天の川が現れました。こうしたデザインアプローチの変化は、シンガポール観光局が海外の照明技術を導入した

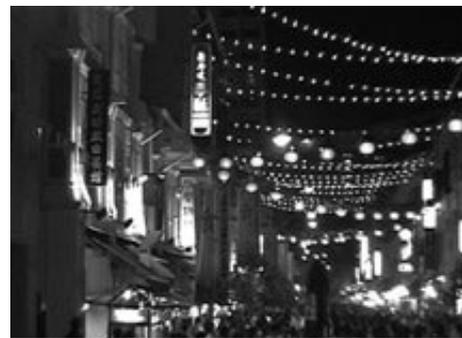


オーロラを表現したホログラフィックチューブ

それと比較すると各地区での祝祭照明は勢いがあり、活気に満ちた印象です。今年のチャイナタウンではとくにそう感じました。通りに吊るされたカラー電球、回転木馬の形をしたランタン、点滅したネオン看板、蛍光灯チューブで輝く物売りのテント・・・異なるタイプの照明（デザインされているもの



旧正月のチャイナタウンの照明



飲食店の立ち並ぶ路地

その他の地区での照明も基本的には似通った手法が用いられており、カラーライティングのロープ、バナーや伝統的なシンボルを象ったものなどが使われています。地区ごとの違いを印象付けるのはシンボルやテーマカラーなど。例えばチャイナタウンでは赤が、ゲイランでは緑がテーマカラーになっています。民族地区での祝祭照明のデザインは、その後数年間のトレンドの予告でもあります。ここ最近、クリスマス照明が洗練されてきたということは、今後の照明デザインにも変化があるかもしれません。



バザールの露店テ



回転木馬の形をしたランタン

今後どうなっていくかはこれからの楽しみですが、シンガポール観光局ではこうした祝祭

を海外からも注目されるようなものにするべく、計画中のようです。照明デザイナーの出番が増えていくことを期待します！！

(Peggy Tan/Singapore)

年間を通して温暖多湿な赤道付近のこの国は、12月だというのに半袖Tシャツ、ノースリーブにサンダル姿で歩く人々が。四季の移り変わりがはっきりとしている日本に暮らす私たちとはちょっと違う季節感があるようです。

自然のポール灯

日本の街中ではあまり見かけませんが、シンガポールには多くのヤシの木が計画的に植えられていてホテルや商業施設、また公共施設の植栽にも多く見られます。この真っ直ぐ伸びるヤシの木の特性を活かした手法がここでは数多く見られました。

樹幹の中ほどにアップ&ダウンの照明器具やスポットライトを取り付けて、自然のポール灯にしてしまうというもの。高級ホテルの中庭など雰囲気大切にシメリー・ホット・クリスマス

日本ではクリスマスといえばさむい季節のあたたかいイベント。ろうそくの暖かいあかりに冷えた体も心も温まって……。しかしここは常夏の国、ホワイトクリスマスもお話の世界だけでしか知ることができません。暑い国ではどんなクリスマスを迎えるのかと思っていたら、あの有名なラッフルズ・ホテルと道路をはさんで向かい合うショッピングモールの前でこんな風景に出会いました。

ファサードを飾っているのは雪山の遠景と雪で覆われた巨大なツリー。もちろん作り物なのですが、はじめて見る雪景色に大はしゃぎすることもたちやその前で

「常夏の国の季節感から学ぶ光の考え方あれこれ」

日本とは全く違う気候の国にはその国ならではの照明の考え方と工夫がみられるのです。

たい場所では特に自然に馴染むこの手法が好まれているようです。

高い位置から光がどこからともなく落ちてくる、そういった配慮が常夏の国のリゾート感を一層盛り上げてくれているのかもしれない。

でもよくよく注意してみると、木に直接器具をビス止めしているのちょっとかわいそう……。



ヤシの木に取り付けられたアップ&ダウンの照明器具



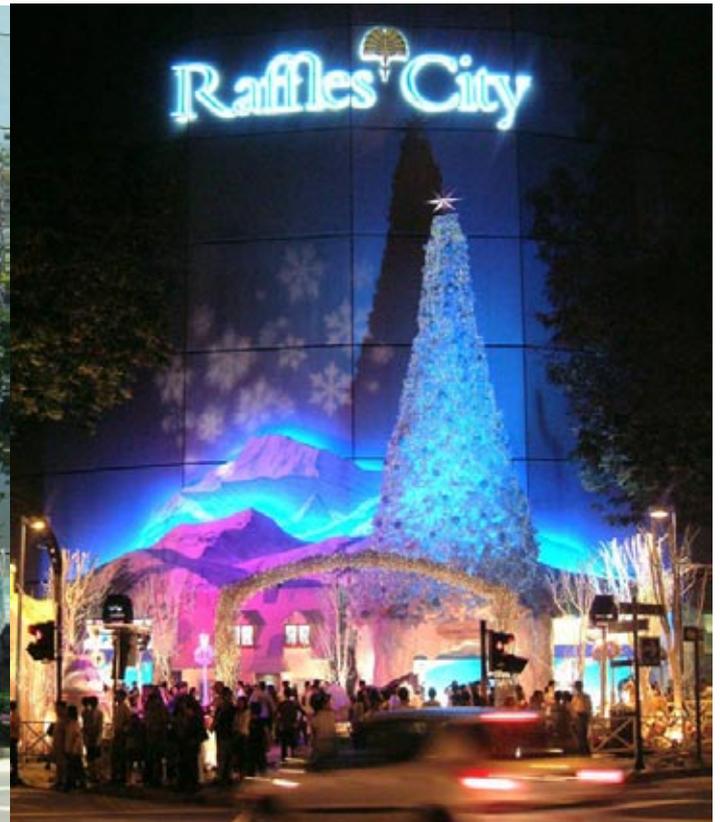
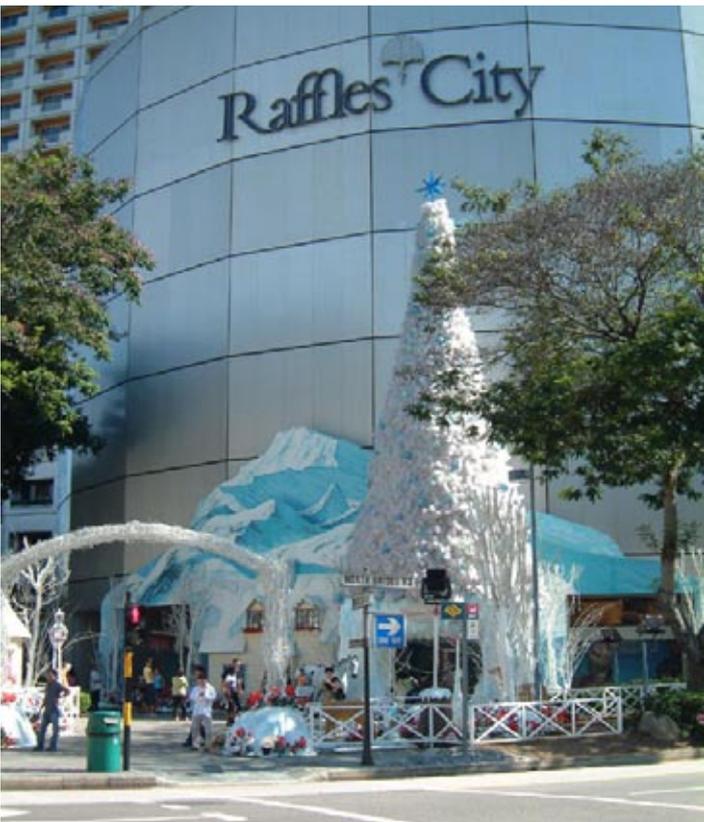
照明器具が剥き出しにならない配慮

記念撮影する大人たちも数多く見られました。見物している人たちに紛れて近づいてみると、夜間ライトアップ用照明器具のまわりもきちんと雪（もちろんにせもの）で覆うなど、夢を壊さない気配りが。

日中に見た景色を目に焼き付けて、再び夜に見直してこそ照明探偵！ということで、日没後にまた同じポイントにやってきました。そこに現れたのは日中の真っ白な雪景色に替わってブルーにライトアップされたなんとも幻想的な雪景色。日が沈んでもなお汗ばむようなシンガポールのホットなクリスマスの夜を「涼しげ」に演出してくれたのでした。

(橋本八栄子)

ラッフルズ・シティのクリスマスファサード
(左：昼/右：夜)



第 13 回街歩き

「東京ディズニーシーリゾート」

2001 年 12 月 03 日

報告

暦も師走に入り、クリスマスイルミネーションが 24 日を待ち遠しそに街を彩る今日この頃、今回の街歩きは面出団長たつてのリクエストで、なんと「ディズニーシーの初クリスマス」を街歩っちゃいました！

JR 舞浜駅を降り立つと、さっそく天井間接照明のやわらかい電球色のあかりにつつまれ、すかさず照度測定、100 lx 也。柱の拡散型ブラケットライトも目に心地よい明るさ感を与え、とても改札を出たばかりの空間とは思えないほどの光景に、団員一同「うわ～お～」のため息。



舞浜駅改札前

足を進めイクスピアリのゲートをくぐると少し明るさを落とした広場があり、地面には白青緑の LED インジケーター、噴水の淵には青いファイバーの点々照明がランダムに散らばり点灯を繰り返していました。後から思うと、他のエリアがほとんど電球色で統一されているのに比べて、ここは LED やファイバーといった新光源で構成された唯一の公共空間となっていて、ゲートとしての差別化を図る照明計画であったのだなあと、思い当たりました。

次は一同ミッキー型の窓とつり革のあしらわれたモノレールに揺られて、いざディズニーシーへ。このモノレール内の照明は、電球色の蛍光灯が天井に埋め込まれ、天井面には乳白のアクリル面のラインが 2 列発光しているもので、照度は 300 lx 程でした（ちなみに JR 山手線は、むき出し白色蛍光灯で 400 lx）。

ランプの色温度ひとつでこんなにも日常見知った電車内の空間の表情が違ってくるんだなあ、とつくづく実感。癒しがブームのこのご時世、ぜひ各路線会社は帰宅時の車内照明を電球色にスイッチするようなオペレーションを導入してみても？ 路線好感度アップに貢献するかもね？



ディズニーリゾート内モノレール

さあ、ようやく一同チケットゲート内へ！まず目の前に広がるのは水と光と音の競演といったところでしょうか、広場の周囲からプロジェクターで青とナチュラルの 2 色の光が投げられるその噴水の中央にはアクアスフィアと呼ばれる巨大な地球儀が座し、水が絶えず伝い落ちていくその表面全体はゆらゆらと光を映しながら、その足元では効果音とともに吹き上がる噴水が水中照明を受けて輝き、そしてちょっと過剰なばかりの BGM…。

と、今この通信を読んでいる探偵団メンバーの皆さまの中には、まだまだこれから行く予定の方々もいらっしゃることでしようから、各アトラクションの詳細は控えておきましょうね。

ディズニーシー内回遊空間の照明はとにかく電球色一色。各エリアのテーマにちなんでポール灯のヘッドのデザインは色々なのですが、光源は安価で入手の簡単な普通シリカランプ 150 ~ 200 w、ポール灯の高さは大体が 2100 ~ 3500 程度で、ポール灯直下で 20 lx、広場などのベースの照度は 1 lx 程度でした。こうしてきちんと暗い部分をベースに持つことによって各アトラクションやショップなどの明かりが際立って見えてくるのですね。

照明は全てポール灯に集約されており、階段など要所要所にフットライトがあった以外はポラードのような高さの照明器具が皆無なのも特徴的でした。大人向けのディズニーシーとはいえやはり安全上、人の手の触れる高さを避けたためでしょうか。このためせっかく水がテーマのこの場所では、夜の水面の景も期待されたのに、地面に近いあかりが無いと遠景の水面上には一連の暗い帯が連なってしまっていたのは唯一残念な点でした。

と、報告はこんなところに留めますが、皆さん、ディズニーシーへお出かけの際には、是非こんな照明探偵団の解説をチョビッと頭の片隅にとめつつ、ディズニーワールドを堪能してきてくださいね。（田中智香）



ホテル・ミラコスタ



クリスマスツリー / ポートディスカバリー



プロジェクターによる演出照明 / ロストリハーデルタ

報告

今回の街歩きは、今年9月にオープンしたばかりの東京ディズニーシーを調査しました。テーマは「非日常を感じさせる光」。

ディズニーランドやディズニーシーを含む東京ディズニーリゾートは、その150haにも及ぶ敷地のスケールや施設・設備の質から見ると、テーマパークの域をはるかに越えており、一日8万人を超え、それはひとつの「街」であるといえます。

この街はオリエンタルランド社という一つの組織が創造した、外界から完全に切り離された世界です。都市の中ではあり得ない「完全に制御された街」は、しかし実際に歩いてみると以外に普通の街でした。

確かに、敷地内は「南ヨーロッパの港町」や「アラビアンナイトの世界」など7つのテーマに沿ってすべてがデザインされており、白熱電球の街灯による統一された町並み、たくさんのランプを持つ背の低いポール灯による賑やかさの演出、色

とりどりのカラーフィルタを用いた光によるファサードの照明など様々な工夫が見られました。

しかし、これだけコンピュータ技術が発展し複雑な制御が可能となることで、デザインの対象となった人工光を単なる機能的な照明や雰囲気演出する装飾としてだけではなく、光だけでその場を変えてしまうような装置として使ってみてもおもしろかったのではないかと思います。研究会サロンで見た上海やラスベガスのビデオ映像の方が、より非日常的でエキサイティングに感じられるのですが、ディズニーシーはまたこれらとは違ったものを目指しているのかもしれませんが。

でもきっとアトラクションの中の照明はもっとすごかったのではないかな？メリーゴーランドしか乗らなかったからな。本当はもっと乗りたいかったな、というのが本音の感想です。

(田中盛志)

メディテレーニアンハーバー

